

『続コロナ禍歌集』より 田中拓也

現代歌人協会編『続コロナ禍歌集2021年〜2022年』(短歌研究社)が刊行された。同歌集は「共通体験としての『コロナ禍』を短歌で表現」(栗木京子「はじめに」より)した作品を集めたアンソロジーである。

・オンライン会議終はればしんとひとり生身なまみの桃を猛然と食む

小島ゆかり

・トランプの絵札のように集まって我ら画面に密を楽しむ

俵 万智

コロナ禍の日々の中で最も普及したのはZOOM等を活用したオンライン会議であろう。直接、同じ場所で対面しない型式の会議は確かに感染対策としては有効であった。だが、直接会えない中で生まれる違和感は根深い。小島はオンライン会議後に「桃」を食べる時の感覚を通して、その違和感を表現している。俵はオンライン上の交流を「密を楽しむ」と一見肯定的に詠んでいるように見えるが、この歌の根底には直接会うことのできない寂しさがあるように思う。

・「あの夏」と記憶されるか八月の樹下にならびてワクチンを待つ

後藤由紀恵

・アリ殺しゴキブリ殺しハエ殺し蚊殺しのわれワクチンを打つ

馬場あき子

ワクチンをいつ打ったか、何回打ったかという会話も日常的に交わされた話題と思う。後藤はワクチンを接種する自分を長い時間の中で俯瞰して詠むことを通して、作品に抒情性を生み出している。馬場は生き物を殺す自分でありながらワクチンを打って生きようとする「われ」を通して、命の重みを考えさせる作品を詠んでいる。

これらの作品について共通して言えるのはコロナ禍の中で詠まれたという前提を外しても成立する秀歌ということである。

・コロナ禍を生きるは幸せならざれどそれさへ知らぬきみをかなしむ

永田 和宏

逆にコロナ禍ということ踏まえて読むことによって、読みが深まる作品もある。永田は「コロナ禍を生きるは幸せならざれど」と詠みながら、特殊な時間を共に過ごすことのできないまま彼岸へ行った「きみ」への痛切な想いを詠んでいる。コロナ禍の中で直接会えない寂しさを詠んだ作品は沢山あるが、永田の相聞歌から伝わってくる「きみ」への想いはその状況を踏まえて読むことを通して読者の心に一層染み渡ってくる。

今回、抄出した作品を機会詩や時事詠として鑑賞することは正道と言えるだろう。だが、五人の作品を通して私が感じたのは短歌の持つ定型詩のたくましい「力」であった。優れた作品は時代を超えて読み継がれる「力」を持っている。現代短歌の世界では修辭の巧みさや主題の新しさを追究した作品も沢山生まれているが、本歌集を読みつつ改めて短歌という詩型の持つ魅力を私は感じている。